

## 『詩經』境界神祭祀詩に於ける採草の興詞に就いて

福本郁子

### (一)

『詩經』中、詩中に採草行爲を謠う詩で、征役に關わる内容を謠うものがある。その多くは篇乃至は章の首二句に興詞として謠われ、これらの採草の興詞が何故に征役を内容とする詩に謠われるのかに就いては、從來様々な解釋が爲されているが、その主なものは、征夫に對する女性の憂思を謠い興すと解するものである。しかし例えば召南・采芣篇の「于以采芣、于沼于沚」「于以采芣、于澗之中」や、同采蘋篇の「于以采蘋、南澗之濱。于以采藻、于彼行潦」の句に就いては、宗廟祭祀に供する爲の採草行爲と解するのが定説となつてゐるのに對して、征役を内容とする詩の採草の興詞に就いては、宗教儀禮とは無關係の行爲として解釋されるのが普通である。采芣篇、采蘋篇の採草の興詞が宗廟祭祀に關わる行爲と解されるのは、采芣篇の毛序に「采芣、夫人不失職也。夫人可以奉祭祀、則不失職矣」、采蘋篇の毛序に「采蘋、大夫妻能循法度也。能循法度、則可以承先祖、共祭祀矣」とあり、また采芣篇の毛傳に「公侯夫人、執芣菜以助祭、神饗德與信、不求備焉」とあることを踏襲したものとされるが、『詩經』の詩を宗教詩として見た場合、採草の興詞で謠い興す總ての篇、乃至は章が作られた背景には、何等かの古代習俗や宗教儀禮の介在を求めるべきであると思う。

本論は、『詩經』中で採草を興詞、乃至は興的發想を有する句として謠う詩の中から、征役を内容とする詩七篇を解釋し、これらの詩が征役を背景とする境界神祭祀詩であり、そこに謠われた採草の目的が、境界神祭祀に供する蔬菜を採集すること、或いはそこで着用する祭服製作の爲の染料を採集することであり、それが出征者の旅の安全や無事な歸還を祈願する爲の呪的行爲であつたことを明らかにするものである。

## (一)

征役に關わる内容の詩に採草が謠われる理由は何處にあつたのであろうか。換言すれば、征役詩に謠われた採草の興詞、乃至は興的發想を有する句とは、如何なる神を祀る爲の呪的行爲であつたのだろうか。『詩經』の詩を宗教詩とする立場から言えば、採草の背景には、嘗て古代習俗や宗教儀禮が存したと考えねばならない。そしてそれが如何なる理由で征役を内容とする詩中に興詞、乃至は興的發想を有する句として使用されたかを明らかにする必要がある。

出征に際して様々な儀禮が行われる場所は主に宗廟であつた。例えば、『左傳』閔公二年に「帥師者、受命于廟、受賑于社」、また『國語』晉語五に「乃發令于大廟、召軍吏而戒樂正」と、宗廟に於いて征役に關する受命が爲されたことが記され、『孫子』始計篇「夫未戰而廟算、勝者得算多也。未戰而廟算、不勝者得算少也」の「廟算」に就いて、吉天保注が「古者興師命將、必致齋於廟、授以成算、然後遣之。故謂之廟算」と解し、また朱駿聲が『說文通訓定聲』孚部廟字條に於いて「按、古者行禮必于廟、謀事必于廟、故儀禮士冠禮、筮於廟門、禮記祭統、廟中者竟內之象。凡國功曰廟算廟謀也」と解する如く、出征前の謀議が爲された場所も宗廟であつたことがわかる。

同様に共同體内の境界と見なされる場所に於いても、廣く出立に際して様々な祭祀儀禮が行われた。『詩經』大雅・蕩之什・烝民篇に「仲山甫出祖、四牡業業」、同韓奕篇に「韓侯出祖、出宿于屠」、また『史記』五宗世家、『漢書』景十三王傳

に「榮行、祖於江陵北門」と見える「祖」、『周禮』夏官・大馭に「大馭、掌馭玉路以祀。及犯軼、王自左馭、馭下祝。登、受轡、犯軼遂驅之。及祭酌僕。僕左執轡、右祭兩軼、祭軌乃飲」、『說文』に「軼、出將有事於道、必先告其神、立壇四通、樹茅以依神爲軼。既祭、犯軼輒牲而行爲範軼」と見える「軼」、『禮記』曾子問篇に「諸侯適天子、必告于祖、奠于禩。冕而出視朝。命祝史告于社稷、宗廟、山川。乃命國家五官而后行。道而出」、また「諸侯相見、必告于禩。朝服而出視朝。命祝史告于五廟、所過山川。亦命國家五官、道而出」と見える「道」、『儀禮』聘禮に「厥明、賓朝服、釋幣于禩。有司筵几于室中。祝先入、主人從入。主人在右。再拜。祝告。又再拜。釋幣制玄纁束、奠于几下出。主人立于戶東、祝立于牖西。又入、取幣降、卷幣實于筭、埋于西階東。又釋幣于行、遂受命。上介釋幣、亦如之」と見える「行」がこれに當たる。「祖」は境界神祭祀に於いて境界神に供薦する意、「軼」は境界神祭祀に於いて犬性を以て祭場を祓禳する意、「道」は境界神祭祀に於いて首を以て祭場たる四辻を祓禳する意、「行」はその原初義が示す如く四辻の象形で、そこで行われる境界神祭祀を示す語であつた。そしてその祭祀の目的は、境界神に他行者の無事を祈願することにあつた。『詩經』に於いては、境界神祭祀終了後に行われた直會を示す「飲餞」の語を謠うことにより異國へ嫁いで行く女性が出立の際に自國の境界神を祀つて旅の安全を祈る詩が、鄘風・泉水篇（第二、三章）であり、「道周」「周行」という境界自體を示す語や、そこに自生する境界神の依代を謠うことにより境界神を祀る詩が、唐風・有杕之杜篇、同杕杜篇、小雅・鹿鳴之什・杕杜篇であり、境界神を直接祀る詩ではないが、「周道」の語を一族との離別を象徴するものとして謠つた詩が檜風・匪風篇であつた<sup>①</sup>。そして周南・卷耳篇に「采采卷耳、不盈頃筐。嗟我懷人、寘彼周行」と謠われていることから考えると、出征する者、或いは既に出征して遠くに居る者の無事を祈り境界神を祀る際に使用する蔬菜等となる草の採集が、一部の征役詩に採草の興詞として定着したのである。草を摘み取ることは、赤塚忠が指摘する如く女子の聖務であつた<sup>②</sup>。女子が草を摘み取り、その草を供物として捧げ、或いはその草で祭服を製作することは、神を祀らんとする専一な行爲に他ならず、それはそのまま出征兵士の無事を祈る共同體全體の祈りへと繋がるのである。換言すると、征役詩に謠われる採草の興詞は、その動作主である女子の専一行

爲の形を借りた、共同體全體の神に對する願ひなのである。従つて、征役に關わる内容の詩、嚴密には、征役の長びくを訴え出征者の無事な歸還を祈る詩、または出征者の出立に當たり旅の無事を祈る詩に謠われる採草の興詞、乃至は興的發想を有する句は總て境界神祭祀詩として解釋すべきなのである。

如上の假説に基づき、次に周南・卷耳篇、豳風・七月篇、小雅・鹿鳴之什・采薇篇、同出車篇、同杕杜篇、小雅・谷風之什・北山篇、小雅・魚藻之什・采芣篇の解釋を試みることにする。

## (三)

周南・卷耳篇第一章に採草は、「采采卷耳、不盈頃筐。嗟我懷人、寘彼周行」と謠われる。訓讀と口語譯を記すと、

〔訓讀〕卷耳<sup>ケイジ</sup>を采<sup>と</sup>り采<sup>と</sup>るも、頃筐<sup>ケイキヤウ</sup>に盈<sup>み</sup>たず。嗟<sup>ああ</sup>我人<sup>われひと</sup>を懷<sup>おも</sup>ひ、彼の周<sup>まが</sup>れる行<sup>みち</sup>に寘<sup>お</sup>く。

〔口語譯〕オナモミは摘めども摘めども、籠に滿たぬ。ああ、私はあの人（の無事な歸還）を願ひ、（摘み取ったオナモミを境界神に捧げんと）道の隈に置く。

となる。<sup>③</sup>「卷耳（和名オナモミ）」は、潘富俊が「今名、蒼耳、羊帶來」として、「蒼耳爲古時候的野菜、採幼苗嫩葉炒熟、但滑而少味、應爲窮苦人家之菜蔬、或年歲歉收時的救荒食草」（『詩經植物圖鑑』二一頁）と言う如く、古くは若葉を蔬菜とした。柴田桂太によると、我が國に於いても若葉を茹でて蔬菜の代用としたという（『資源植物事典』八九頁）。また「蒼耳子（ソウジシ）」と稱されるこの植物の種子は、解熱、發汗、頭痛に効果があるとされ、また民間では莖葉を揉み、蟲傷に塗布して用いることがあるという（同書八九頁）。このように「卷耳」は食用の他、藥用ともされる植物であるが、胡承珙が「爾雅、卷耳、苓耳也。郭注引廣雅云、臬耳也。亦云胡臬、江東呼爲常臬。爾雅釋文引廣雅又云、苓耳、蒼耳。……馮氏名物疏駁之曰、陶隱居云蒼耳名常思菜、僉人皆食之、何謂但堪入藥乎。其以卷菜爲卷耳、又未知何據也。承珙案、杜子美驅

豎子摘蒼耳詩云、蓬莠獨不焦、野蔬暗泉石。卷耳況療風、童兒且時摘。又云、放筐亭午際、洗剝相蒙密。登牀半生熟、下箸還小盆。加點瓜蒌間、依稀橘奴跡。是亦以卷耳爲蒼耳、蓋唐時猶以充蔬食者。明周憲王救荒本草亦云、蒼耳嫩苗及子皆可食」と解する如く、唐代に於いても尙食用とされていた植物であり、卷耳篇の中でこの採集が謠われるのは、藥效によるものではなく、食用にする爲と解すべきであろう。

この「卷耳」の採集が謠われる首二句「采采卷耳、不盈頃筐」は、毛傳が「憂者之興也」とする如く興詞であり、これに就いては赤塚忠が、『采卷耳（卷耳を采る）』という『興』は、もと神の恩寵おんちようを求めて神に蔬菜そさいを獻ずることから起こっている。そこで、ここでも神かけて思う人に會わせよという願望をなお持ち傳えている。それを持ち傳えているので、苦難を冒して後を追おうともし、その苦難が思う人の魂を揺り動かせと念じている。これを訴えるには、單に思いに暮れるだけでなく、苦難を冒す誠意と、それにもかかわらずその願望の達せられない傷心とを敘述する章が必要となつていたのである」と解するのが半ば正しく、「卷耳」を蔬菜とするのは、神に供する爲なのである。そしてその神とは「周行（周まがれる行みち）」、即ち道の隈に出現すると信じられたその地の境界神であつたと考えられる。唐風・有杕之杜篇に「有杕之杜、生于道周（有杕の杜は、道の周くまに生ず）」、また小雅・南有嘉魚之什・菁菁者莪篇に「菁菁者莪、在彼中阿（菁菁たるは莪、彼の阿に在り）」と謠われる如く、道や河川の灣曲した場所は、言わば人界と異界の交差する地點であり、神靈の出現し易い一種の境界空間と見なされていた。従つて、卷耳篇第一章は、摘み取つた「卷耳」をその地の境界空間である道の隈に供して境界神を祀り、征夫の無事を祈願する内容を謠つたものであることがわかる。

卷耳篇の「不盈頃筐」は、遠くに居る征夫を思い卷耳を摘む仕事かと思うようにはかどらぬを謠う句であるが、これと同内容の句を有する詩が小雅・魚藻之什・采芣篇である。採草の興詞が見える第一、二章を以下に記す。

第一章 終朝采芣、不盈一朶。予髮曲局、薄言歸沐。

第二章 終朝采藍、不盈一檐。五日爲期、六日不詹。

(押韻 第一章 ○Ⅱ屋部、●Ⅱ覺部：屋覺合韻。 第二章 △Ⅱ談部)

以下に語釋を記す。○「終朝」は、毛傳が「自旦及食時爲終朝」とする如く、夜明けより食時までの早朝を指すと解することもできるが、孔穎達が「以興此婦人終日爲此家務、而不能成其一事者、此婦人由志念於夫故也」とする如く、終日の意とも解し得る。孔穎達說に従う。○「采」は、周南・芣苢篇の毛傳に「采、取也」とあり、屈萬里が「采采、採而又採也」とする。採の原字で、取、とる、採集する意。○「綠」は、魯詩は葦に作り、王先謙が「案、魯綠作葦者、王逸楚詞離騷注、葦、王芻也。詩曰、終朝采葦。明魯作葦、毛作綠、借字」とし、また馬瑞辰も「瑞辰按、綠者、葦之假借。說文、葦、王芻」とする如く、葦の假借字。葦は、潘富俊が「據爾雅所言、葦、葍也。陸璣詩疏云、有草似竹、高五六尺、淇水側人謂之葦竹也。這種長於淇水附近的禾草、莖葉似竹、當地人稱爲葦竹或綠竹。……廣本草注描寫葍草、葉似竹而細薄、莖亦圓小。生平澤、溪澗之側、和今日所見的葍草、在形態和生育地上均相同。古人煮其枝葉以染黃色、極鮮好、主要用以染製黃色官服、古代王室常驅使百姓採集葍草。……以葍草植株洗瘡治瘡有其療效、俗稱葍葍草」(前掲書一〇一頁)と言う如く、古くはこの枝葉を煎じたもので布を鮮やかな黄色に染めた。和名コブナグサ。各地の田畑、原野、山麓等に多い一年生草本。柴田桂太によると、我が國では現在八丈島で黄八丈染に利用され、通常、夏に採取して乾燥させ、翌夏に煎じ、その煮汁に布を浸して椿の灰で發色させるという(前掲書一二八―一二九頁)。潘富俊によると染料と藥草の二用途があるが、後述する如くこは染料としての用途を目的とした採集である。○「采」は、袁梅が「不滿一捧。盈、滿。采、居」。即採之古體。兩手相承托曰采、即口語中所謂捧」と言う如く、採の原字で、兩の手でひとすくい。意。「不盈一采」は、朱熹が「言終朝采綠、而不盈一采者、思念之深、不專於事也」、袁梅が「綠、乃易采之物、然終朝而不盈采、足見這女子思夫情深、不專于事。本句之義、與周南・卷耳、采采卷耳、不盈頃筐類同」と言う如く、卷耳篇の「不盈頃筐」と同じく、征夫のことを思い憂える餘り、綠摘みがはかどらず、兩の手のひらひとすくいにすら満たぬというのである。○「曲局」は、陳奐が「正月、局、曲也。卷阿、卷、曲也。局卷竝有曲義」と言う如く、「局」にも曲の義があり、曲がる様を形容する語。こは征夫の身を

案ずる餘り髪が亂れもつれる様。○「薄言」は、裴學海が「薄言亦乃也」と言う如く、二字で「ここ一二」と讀む語助詞。○「沐」は、屈萬里が「沐、洗髮也」と言う如く、髪を洗う意であるが、『儀禮』士喪禮「沐巾一、浴巾一」の「沐」に就いて胡培翬が「沐、浴對文異、散文通、則浴亦可稱沐」とする如く、「沐」もまた浴の意に解し得る。沐浴する、神を祀る爲に身を清める意。○「藍」は、鄭玄が「藍、染艸也」、潘富俊が「藍自古卽爲重要藍色染料之一（另爲蝶形花科的木藍及爵床科的馬藍）。枝葉採集製藍、粗製品謂之藍靛、精緻者則是用於繪畫之花青。在人造染料發明之前、本植物需求量甚大」（前掲書二六一頁）と言う如く、枝葉を採集して藍色の染料とする。和名アイ。蓼藍たであいとも稱し、我が國では中國から輸入された最も古い染料植物の一種とされる（柴田桂太前掲書一頁）。○「一檐」は、毛傳に「衣蔽前謂之檐」とある如く、衣の前面を覆う布、前垂れ。その裾を持つてできる窪みに、採った草を入れるのである。○「五日爲期、六日不簪」の「簪」は、毛傳に「簪、至也」とあり、屈萬里も「簪、至也。六日不簪、謂已六日而仍不得至也。至、謂至家」とする如く、至る、家に至る意。「五日爲期、六日不簪」の二句は、毛傳に「婦人五日一御」とあり、これを馬瑞辰が「瑞辰按、六日祇爲過期之喻。內則、妾未滿五十者、必與五日之御。正義引王肅云、五日一御、大夫以下之制。其申毛云、言常日以五日爲御之期而望之、至六日而不至、尙以爲恨、況今日月長遠、能無思乎。舉近以喻遠也。……今按正義引孔晁曰、傳因以行役過時刺怨曠也、故先序家人之情、而以行役者六日不至爲過期之喻、非止六日。其申毛最得詩人言外之旨」と、「六日」を夫が歸らぬことの比喻と解するは正しいが、「五日」を『禮記』内則篇によつて解し、婦人は五日に一度夫に侍するものであるのに、六日経つても夫が至らぬことを恨む意とする點は肯首し難い。また姚際恆は「五日爲期二句、五日、成言也。六日、調失之意。言本五日爲期、今六日尙不瞻見、只是過期之意、不必定泥爲六日而咏也」と、「六日」は「五日」という約束の日時を過ぎたことを表し、必ずしもその日時に拘る必要はないとするは正しいが、「六日、調失之意」と、「六日」に諧謔の意を含むと解するは、この詩の詩意を「此婦人思其夫之不至、旣而敘其室家之樂」とする爲で、この點に疑問が残る。程俊英等が「按五日六日並非確指、此二句泛言約定五天回家、却過期而不返」とする如く、「五日」「六日」とともに實數ではなく、歸ると約束し

た日を過ぎてても歸つて來ないことを言う。

采緑篇第一、二章は、句中に征役に關する語が一字も見えていないが、從來より征役に關わる内容を謠つたものと解されている。かく解釋し得るのは、興詞の「終朝采緑、不盈一掬」、「終朝采藍、不盈一擔」が、周南・卷耳篇の「采采卷耳、不盈頃筐」と同じ發想から成る句であると考えられ、その卷耳篇が征役に關わる内容を謠つたものであるからであろう。

「終朝采緑、不盈一掬」、「終朝采藍、不盈一擔」は、毛傳に「興也」とあり、馬瑞辰が「瑞辰按、緑者、菴之假借。說文、菴、王芻。又云、藎、草也。太平御覽引吳普本草云、藎草一名黃草、以其可染黃也。此詩二章采藍、藍可以染青者也。則首章采緑亦以染草取興」と言う如く、染料となる「緑」「藍」を呪物とする興詞である。征役の終息を境界神に祈る内容の詩中に、染料である「緑」「藍」を摘む行爲が興詞として謠われている理由は何處にあるのであろうか。

卷耳篇の場合、「卷耳」は古來より食用とされた植物であつたので、これが境界神に供する蔬菜とされ、「采采卷耳、不盈頃筐」の句が供物たる「卷耳」を採集することを呪的行爲とする興詞であると解釋した。采緑篇の場合、「緑」は潘富俊が「以藎草植株洗瘡治瘡有其療效、俗稱菴蓐草」と言う如く、藥用としての用途も考えられるが、第二章の「藍」と併記されていることから「緑」もまた染料と考えるべきであろう。更に附け加えるならば、赤塚忠が「古代において蔬菜とされているものは後代には藥草として傳えられるものが多いので、果たして當時藥草としてのみ考えられていたか否かは疑問である」と指摘する如く、採草の詩の解釋に植物の藥效を安易に當て嵌めるのは避けるべきであることを考え併せると、染料としての用途を目的とした植物であるとしか考えられない。

染料となる植物の採集を興詞とする理由に就いて考えるに、王風・采葛篇第二章に「彼采葛兮。一日不見、如三月兮（彼の葛を采る。一日見ざれば、三月の如し）」と謠われていることを提起したい。「彼采葛兮。一日不見、如三月兮」は、毛傳に「興也」とある如く興詞である。「葛（和名クズ）」は、我が國に於いては、葛粉を製する原料として、また葛根と稱する漢方藥としてよく知られる所であるが、潘富俊が「葛自古即爲著名的纖維植物、供製作葛布、如越絶書、……勾踐種葛、使



越女織治葛布、獻於夫差。葛布在棉花引進之前、是重要的夏服材料、周書云、葛、小人得其葉以爲羹、君子得其材以爲君子朝廷夏服、表示葛的主要用途是提取纖維供製夏天穿的衣物、嫩葉有時可以作菜。其纖維也是古代製鞋材料、稱爲葛屨、齊風・南山、魏風・葛屨、小雅・大東中均有提及、葛藤在周朝時應爲普遍栽培的經濟植物。再由白居易詩、天寒身上猶衣葛、日高甌中未拂塵、可知至少到唐代爲止、葛還是重要的夏布材料（前掲書一九頁）と言う如く、中國古代に於いては纖維を取つて葛布や葛屨（靴）を作り、またその若葉を食用とすることも可能な植物であつた。周南・葛覃篇第二章に「葛之覃兮、施于中谷、維葉莫莫。是刈是漙、爲絺爲綌、服之無斁」と謠われていることから、これを刈り取つて、煮て纖維を取り、「絺」や「綌」等の葛布を作るのである。「絺」「綌」は、邶風・綠衣篇に「絺兮綌兮、淒其以風。我思古人、實獲我心」と謠われる。ここに見える「古人」とは、周頌・閔予小子之什・良耜篇「以似以續、續古之人」の「古之人」を朱熹が「續謂續先祖以奉祭祀」と解する如く、先祖、祖靈を指す語であり、「古人」もこれと同義である。従つて、綠衣篇の「絺」「綌」は、祖靈祭祀に着用する祭服であることがわかる。葛布が祖靈祭祀に着用する祭服を製作するものであるならば、その材となる「葛」を首句に謠う葛覃篇の「葛之覃兮、施于中谷、維葉莫莫」は、祭服を作る材とする爲の神聖な葛を呪物とする興詞であると解し得るのである。

かく考えると、采葛篇第一章に謠われる「葛」を摘む行爲もまた、何等かの祭祀に着用する祭服を製作する爲の呪的行爲であると解すべきであろう。采葛篇は「彼采葛兮。一日不見、如三月兮」の三句を韻を換えて繰り返す三章疊詠形式の詩であり、如何なる神を祀る詩であるかを示す句が見えない。祀る神が何であるかはわからないが、下二句は、「一日不見、如三月兮」と、神を歡待する意を示す句で構成された詩であることは明らかであろう。ここで「葛」を摘むのは、祭服を製作して神を迎え祀る爲のものである。

祭服を製作する材となる植物は神を祀る爲の神聖なものであるが故に、これを呪物、乃至はこれを摘むという呪的行爲として興詞中に使用されたのである。その興詞を有する詩は、その祭服を着用して神や祖靈を祀ることを内容とする詩であつ

た。染料となる植物を摘む行爲を興詞中に使用する理由もこれと同じであつたと考えられる。即ち、染料となる植物は祭祀に着用する祭服を美しく染め上げる爲の神聖な呪物であり、これを摘むことはその祭服を着用して神や祖靈を祀る爲の神聖な行爲であつたのである。采緑篇は祭服を黄や藍に着色する染料となる植物を摘み取る行爲を興詞中に謠うことで、それを着用して境界神を祀り、征夫の無事な歸還を祈る詩であつたのである。

以上の解釋に従つて、采緑篇第一、二章の訓讀と口語譯を以下に記す。

〔訓 讀〕

第一章 終朝 緑を采るも、一朶に盈たず。予が髮 曲局たれば、薄言に歸りて沐せん。

第二章 終朝 藍を采るも、一檐に盈たず。五日もて期と爲すも、六日もて詹らず。

〔口語譯〕

第一章 終日（境界神に捧げんと）コブナグサを摘めども、兩の手ひとすくいにも満たぬ。私の髮は（あの人の身を案じる餘り）亂れ纏れてしまつたので、いざ歸りて身を清め（境界神を祀り、あの人の無事な歸還を祈ら）ん。

第二章 終日（境界神を祀る祭服を染めんと）アイを摘めども、からげた前垂れの裾にも満たぬ。（あの人は）五日で歸ると言つたのに、（征役が終息しないので）六日たつても歸つてこない。

采緑篇に謠われる採草の興詞は、境界神祭祀に着用する祭服を染める染料となる「緑」「藍」を採集することを謠うことで、境界神を祀り、征夫の無事な歸還を祈る句であつた。

小雅・鹿鳴之什・出車篇第六章に採草は「春日遲遲、卉木萋萋。倉庚喈喈、采繁祁祁。執訊獲醜、薄言還歸。赫赫南仲、玁狁于夷」と謠われる。以下に語釋を記す。

○「遲遲」は、陳奐が「廣雅、遲遲、長也。傳云舒緩。舒亦緩。采叔傳、紆、緩也。舒與緩通。舒緩者、春晝舒長也」と言う如く、ゆるやかな様を形容する語。「春日遲遲」は、春の日が長くなること。○「卉木萋萋」の「卉」は、陳奐が「方

言、東越揚州之間、名草爲卉也。説文、卉、艸之總名也。艸草古今字。卉木萋萋、言草木皆萋萋然也」と言う如く、草の意。「萋萋」は、李雲光が「萋萋爲草木盛兒」と言う如く、草木が盛んに茂る様を形容する語。○「倉庚」は、黄鳥の別稱で、和名コウライウグイス（江村如圭）。○「啾啾」は、鄭風・風雨篇に「雞鳴啾啾」と見え、『説文』に「啾、鳥鳴聲也。重言啾啾」とある如く、鳥の鳴く聲を模した擬聲語。○「采繁祁祁」の「采」は、小雅・魚藻之什・采芣篇に既出。採の原字で、とる意。「繁」は、和名シロヨモギ（江村如圭）。現在では藥材や家畜の飼料として用い、古代に於いては祭祀に供する蔬菜等としての用途があつた（潘富俊前掲書三五頁）。ここは後述する如く、境界神の供物として採集されたもの。「祁祁」は、盛んな様を形容する語で、「繁」を摘む行爲が幾度も繰り返されることを言う。○「執訊獲醜」の「執」はもと「執」に作り、『説文』に「執、捕罪人也。从扌、从幸、幸亦聲」とあり、罪人を捕らえる意。「訊」は、于省吾が「號季盤、執・五十。不賤毀、女多折首執。兮伯盤、兮甲從王、折首執。執、訊古今字」とする如く、號季盤、不賤毀、兮伯盤に見える「執（𢇛）」が「訊」の古字。「𢇛」は、程俊英等が「訊即𢇛之今字、𢇛字形象繫縛之人、故爲俘虜義」と言う如く、人を縛る形に象る字で、敵人、俘虜の意。「獲」は、馬瑞辰が陳碩甫説を引いて「皇矣傳曰、馘、獲也。不服者、殺而獻其左耳、曰馘。彼傳釋馘爲獲、則此詩獲即馘之假借」とする如く、馘の假借字で、敵人を殺した證に耳を切る意。「醜」は、高亨が「醜、周人稱異國敵人爲醜、如今語呼之爲鬼子、此指男俘虜」とする如く、敵國の人間に對する蔑稱で、現代中國語の「鬼子」の如きもの。敵人、俘虜の意。○「薄言還歸」の「薄言」は、裴學海が「薄言亦乃也」とする如く、乃で、「薄言」の二字で「ここ二」と讀む語助詞。「還歸」は、戰役が終つて郷里へ歸ること。○「赫赫」は、李雲光が「案赫赫爲顯盛兒」と言う如く、非常に盛んな様を形容する語。○「南仲」の名は、大雅・蕩之什・常武篇にも見え、境武男が「この歌は南仲その人の出車ではなく、ただ傳説の將軍の名を引いただけであり、作歌せられたのは宣王時代と見られる」と解し、「むかし南仲　えびすをはらう、いまおもう　そのいさおしよ」と譯出するのが略正しく、幾多の勝利をおさめた英雄として「南仲」の名を假りたもの。但し、その人物が實際に生きた時代に作られたとは限らないので、宣王期の作詩とすることはできない。

○「玁狁于夷」の「玁狁」は、小雅・鹿鳴之什・采芣篇の毛傳に「玁狁、北狄也」とあり、これを鄭玄が「北狄、今匈奴也」とするに據り、北方の異民族の名。北狄、匈奴のこと。「于」は、王引之が「于、猶是也。詩出車曰、玁狁于襄、玁狁于夷。言玁狁是襄、玁狁是夷也」（『經傳釋詞』）と言う如く、是で、「ここ一二」と讀む語助詞。「夷」は、毛傳に「夷、平也」とあり、平らげる、伐ち鎮める意。

出車篇は、第六章に「赫赫南仲、玁狁于夷」とある他、第三章に「赫赫南仲、玁狁于襄」、第五章に「赫赫南仲、薄伐西戎」とあり、「南仲」の功績が讃えられている。「南仲」は語釋で述べた如く、古の戰爭に於いて最も多くの勝利を得た傳説上の英雄として語り繼がれた人物であつたと考えられる。従つて、出車篇の詩意は、「南仲」の名に假託して先祖の功績を讃える内容を諺うものと考えるべきであらう。

では先祖の功績を讃える内容の詩中（章中）に採草が諺われる理由は何處にあるのであらうか。言う迄もなく先祖の功績を讃える詩は宗廟に於いて諺われるものである。従つて、本篇を卷耳篇や采芣篇の如く、一族にとつての境界空間に於いて諺われた詩と解することは出来ない。また本篇の採草の句は、卷耳篇や采芣篇の如く章全體の内容を規定する興詞として章の首句にあるのではなく、第六章の四句目にある。従つて、本篇のこの句は章全體を規定するものではない。では「采芣祁祁」の句とその下に續く「執訊獲醜、薄言還歸。赫赫南仲、玁狁于夷」の句との繋がり如何に考えたらよいのであらうか。

先ず「芣」に就いて考えると、豳風・七月篇に「采芣祁祁」と同じ句が見え、毛傳が「芣、白蒿也。所以生蠶。今人猶用之」と、「芣」を養蠶に用いる植物であると解しており、以來、殆どの注釋書がこれによつてゐる。「芣」が養蠶に用いられる植物であつたことは必ずしも否定し得ないが、毛傳がかく解釋した要因として考えられるのは七月篇の upper 句に「女執懿筐、遵彼微行、爰求柔桑」とある爲で、「桑」が蠶の飼料として用いられる植物であつたからであらう。そしてこれに繼續する「采芣祁祁」の句に見える「芣」もまた同様に養蠶に用いられる植物と解釋したと考えられる。

赤塚忠は七月篇の「芣」に就いて、「采芣篇の本文に依れば芣は水藻でなければならない。少なくとも水際に生ずるもので

あるはずである。ところで水生の繫は二月に陂澤の中に生じその根莖は生、熟、蒞<sup>そ</sup>、曝<sup>ばく</sup>いずれにしても食用となる嘉蔬<sup>かそ</sup>である（『本草綱目』参照）。すなわち必ずしも朴素な菜とも言えず、その時になれば女子が相連れ立って採集したことは想像に難くない。七月篇に『春日載陽、有鳴倉庚。女執懿筐、遵彼微行、爰求柔桑。春日遲遲、采芣苢<sup>ふび</sup>祁祁。女心傷悲、殆及公子同歸』とあるは、『夏小正』とはその順序倒逆しているが、求桑は采芣苢に冠る事實ではなく、求桑と采芣苢とは相並列した等しく春の景事である<sup>(8)</sup>と、召南・采芣苢第一章に「于以采芣、于沼于沚。于以用之、公侯之事」、第二章に「于以采芣、于澗之中。于以用之、公侯之宮」とあることから、七月篇の「女執懿筐、遵彼微行、爰求柔桑」と「春日遲遲、采芣苢祁」は繼續した内容を諺う句ではなく、並列の關係にあると解し、「芣」は水藻、若しくは水邊の草で、古代に於いては嘉蔬として珍重されたと指摘する。蔬菜とされた「芣」は、采芣苢に諺われている如く、神や祖靈に捧げられたのである。更に付け加えるならば、七月篇の「女執懿筐、遵彼微行、爰求柔桑」と「春日遲遲、采芣苢祁」は、並列の關係にあるのではなく、やはり繼續した内容を諺う句ではないかと思う。後述するが、ここに諺われる「柔桑」もまた「芣」と同様に神や祖靈に捧げられる供物であつたと考えられるからである。

潘富俊も「古代也常採集白蒿供祭祀之用、如左傳所說、蘋、芣、蘊藻之菜、可薦於鬼神、可饁於王公、夫人執芣菜以助祭、均可說明白蒿是古代重要的祭品和野蔬。召南・采芣苢採集芣苢即爲了祭祀目的」（前掲書三五頁）と、「芣」が祖靈祭祀に用いられたことの證として、『左傳』隱公三年に「蘋、芣、蘊藻之菜、筐筥錡釜之器、潢汙行潦之水、可薦於鬼神、可羞於王公」とあるを擧げており、そこには「芣」が祖靈祭祀に供せられたことが明確に示されている。出車篇の「芣」は神に供する爲の蔬菜であり、「采芣苢祁」はその神を祀る爲の行爲であつたのである。

従つて、「采芣苢祁」という行爲と「執訊獲醜、薄言還歸」、「赫赫南仲、玁狁于夷」との關係を如何に解すべきかと言うと、「執訊獲醜、薄言還歸」は、敵を討ち鎮めて戦争を終結せしめ、家に歸ることを諺う句であるから、その實現を願う者の具體的行爲が「采芣苢祁」ということになり、その結果、玁狁を討ち鎮めた先祖達の功績を諺う句が「赫赫南仲、玁狁于夷」

夷」ということになる。征夫の還歸を願う爲の採草とは、卷耳篇や采綠篇の如く境界神に對して爲されたものに他ならない。即ち「采繁祁祁」は興詞ではないが、卷耳篇や采綠篇と同様、境界神祭祀の爲の採草であり、敵を討ち鎮めた征夫達が歸還し、「南仲」の名に假託された祖先が勝利をおさめたことを象徵する興的發想を有する句なのである。

以上の解釋により、出車篇第六章に訓讀と口語譯を施すと以下の如くなる。

〔訓 讀〕春日遲遲たり、卉木萋萋たり。倉庚喈喈たり、繁を采ること祁祁たり。訊を執へ醜を獲り、薄言に還歸せん。赫赫たる南仲、玁狁于に夷ならげり。

〔口語譯〕春の陽はゆるやかにのび、草木ものび茂る。コウライウグイスはカイカイと鳴き、（乙女は境界神を祀らんと）シロヨモギを一心に摘む。（あの人が）敵を捕らえ俘虜を殺し、歸らんことを（境界神に祈る）。（そして）勇ましき南仲は、玁狁を討ちしずめ給うたのだ。

出車篇に謠われる採草の句は、摘み取った「繁」を境界神に捧げ祀り、戦争の速やかな終息と征夫の無事な歸還を祈願する興的發想を有する句であり、この詩が祖先の戦に於ける功績を讃える内容であることを考え併せると、嘗て戦争が速やかに終息したと征夫が無事に歸還したことを象徵する句であると解し得るのである。

豳風・七月篇には、出車篇と同じ「采繁祁祁」の句が見える。その第二章には「七月流火、九月授衣。春日載陽、有鳴倉庚。女執懿筐、遵彼微行、爰求柔桑。春日遲遲、采繁祁祁。女心傷悲、殆及公子同歸」と、「繁」の採集と「柔桑」の採集が謠われる。

「繁」「桑」採集の併記に就いては、いずれも養蠶の爲の採草と解するのが通説となっている。かく解しても通ずるのであるが、既に述べた如く赤塚説により、「繁」は食用に供する植物と解する。但し、赤塚は「爰求柔桑」と「采繁祁祁」を繼續する内容ではなく、並列の関係にある内容と解していることから、「繁」は食用、「桑」は養蠶の飼と見なしているようである。しかし、「桑」は「繁」と同様食用ともされた植物であり、ここは神に供する蔬菜として採集されたと考える。

「桑」は、潘富俊が「桑樹爲中國最早栽培的樹種之一、也是古時民宅附近最普遍的植物、桑梓一詞遂成爲故郷的代稱。桑樹的用途極廣、桑葉可用以養蠶、桑椹則味甜可食、既可救荒充飢亦可釀酒。桑皮自古卽爲名藥、樹皮製紙、謂之桑皮紙。桑材緻密、古人常取之以爲弓、卽禮所謂的射人以桑弧蓬矢……、又可用於製造農具、器具、車轅等」（前掲書八三頁）と言う如く、その用途は實に多様であり、葉は養蠶の飼に用いられ、椹（實）は食用や釀酒に用いられ、また樹皮は製紙の材、木材は弓の材とされた。しかし『本草綱目』卷三十六、木部に「桑」の項目が收録されており、「桑葉」が「炙熟煎飲、代茶止渴」と、茶の代用となることが記される他、多種多様な效能があるとされていることから推すに、古くは食用、飲用としての用途があつたと考えられる。薬用としての用途が知られる植物の多くが古くは食用とされていたことに就いては、小雅・谷風之什・北山篇に於いて胡承珙や赤塚忠が指摘する所である。我が國に於いても「桑」は、柴田桂太が「クワの果實は成熟すれば紫黑色多漿となり、甘味を有し食用、釀酒用となる。……葉は若葉のとき天ぷらにして食用にし、また桑茶とする」（前掲書一九四頁）と言う如く、實のみならず葉も食用とされた植物である。『詩』にも實は供物として謠われており、魯頌・泮水篇第八章に「翩彼飛鵲、集于泮林。食我桑黹、懷我好音（翩たる彼の飛鵲、泮の林に集ふ。我が桑黹を食らひ、我に好音を懷れ）」とある。飛來した「鵲」とは祖靈の表象で、この鳥が「桑黹（＝桑椹＝クワの實）」を食べることは、祖靈が祀りを受け入れることに他ならない。故にこれは「鵲（＝祖靈）」にこれを供し祀ることで、一族に「好音（＝慶福）」を恵まれんことを祈る句なのである。桑樹は養蠶に用いられる他、實や葉が神への捧げ物として採集された神聖な植物であつたと考えられる。従つて、「爰求柔桑」「采繁祁祁」は、神に供する蔬菜を摘むことを謠う句であつたことがわかる。下句に「女心傷悲」と、女子が悲しむのは征役に赴く男子との別離の故であり、「柔桑」や「繁」を皆る行爲はその征夫の道中の無事を祈る呪的行爲なのである。周南・卷耳篇等で述べた如く、征夫の無事を祈願する對象は一族の境界神であつたので、ここで摘み取る「柔桑」や「繁」は、境界神への供物と解すべきなのである。

七月篇の「采繁祁祁」は、出車篇の「采繁祁祁」と同じく興的發想を有する境界神祭祀の爲の採草行爲である。そしてそ

れぞれに謠われる詩の内容によつてその意味が少しく異なっている。出車篇は先祖の功績を讃える内容を謠うものであるから、「采繁祁祁」は、その昔、征夫達が無事に歸還したことを象徴する句として用いられている。これに對し、七篇の場合は「春日遲遲」とあるので、春の出征に當たり、旅立つ征夫達の無事な歸還を祈願する爲に用いられているのである。

以下に七月篇第二章の訓讀と口語譯を記す。

〔訓 讀〕 七月は流るる火、九月は衣を授く。春日<sup>すなは</sup>載<sup>あた</sup>ち陽<sup>こ</sup>かく、有に鳴く倉庚。女は懿<sup>ふか</sup>き筐<sup>か</sup>を執り、彼の微行に<sup>そ</sup>遵<sup>そ</sup>ひて、爰<sup>こ</sup>に柔桑を求む。春日遲<sup>と</sup>遅たり、繁<sup>と</sup>を采ること祁祁たり。女心傷悲し、殆<sup>こ</sup>はくは公子<sup>とも</sup>と<sup>も</sup>に歸<sup>ゆ</sup>かん。

〔口語譯〕 七月には移ろうなかが星、九月には冬着を授ける。春の日は暖かく、コウライウグイスが鳴く。乙女は深きかごを取り、小道に沿うて、(境界神を祀らんと) 柔らかきクワの葉を摘む。春の陽はゆるゆると長くなり、(乙女は境界神を祀らんと) シロヨモギを摘む。乙女の心は(征夫の身を案じて) 悲しみ傷み、できることならあの方と共に行きたいと願う。

七月篇第二章の「春日載陽、有鳴倉庚。女執懿筐、遵彼微行、爰求柔桑。春日遲遲、采繁祁祁。女心傷悲、殆及公子同歸」は、出車篇と同じく征役に關する内容を謠つたものであり、「爰求柔桑」「采繁祁祁」の採草行爲は章の首句にある興詞の形をとつてはいないが、興的發想を有する句であり、境界神に捧げる供物となる「柔桑」「繁」を採草する呪的行爲であつた。

小雅・鹿鳴之什・采薇篇も征役に關する内容を謠う詩である。全六章から成る詩で、そのうちの前三章を以下に擧げる。<sup>10)</sup>

第一章 采薇采薇、薇亦作<sup>△</sup>止。曰歸曰歸、歲亦莫<sup>△</sup>止。靡室靡家、玁狁之故<sup>△</sup>。不遑啓居、玁狁之故<sup>△</sup>。

第二章 采薇采薇、薇亦柔<sup>○</sup>止。曰歸曰歸、心亦憂<sup>○</sup>止。憂心烈烈、載飢載渴。我戍未定、靡所歸<sup>◇</sup>聘。

第三章 采薇采薇、薇亦剛<sup>□</sup>止。曰歸曰歸、歲亦陽<sup>□</sup>止。王事靡盬、不遑啓處。憂心孔<sup>☆</sup>疚、我行不<sup>☆</sup>來。

(押韻 第一章 ● 微部、△ 鐸部、▲ 魚部。 第二章 ● 微部、◎ 幽部、◇ 月部、◆ 耕部。 第三章

● 微部、□ 陽部、▲ 魚部、☆ 之部)



以下に語釋を記す。○「采」は、小雅・魚藻之什・采芣篇に既出。採の原字で、とる意。○「薇」は、江村如圭が和名を「ゼンマイ」とし、これによる注釋書もあるが、柴田桂太が「わが國では普通ゼンマイに薇の字を充てるが、誤用である」(前掲書三九四頁)とする。境武男がマメグサ、ノエンドウの和名をあてゐるのに従つておく。○「薇亦作止」の「作」は、毛傳に「作、生也」とあり、生じる、生える、芽生える意。「止」は、屈萬里が「止、語已詞」と言う如く、意味の無い語助詞で、訓讀では特に讀まない。○「曰」は、王引之が「說文曰、吹、詮詞也。字或作聿、或作適、或作曰、其實一字也」(『經傳釋詞』)と言う如く、聿・適等と同じ語助詞で、特に意味は無い。「ハコトニ」と讀む。「曰歸曰歸」は、女性が征夫の歸還を待ち望んで速やかに我が家へ歸れと願う句。○「莫」は、鄭玄が「莫、晚也」とし、高亨が「莫、古暮字。此句言、快要過年了」と言う如く、暮の古字。「歲亦莫止」は、歲が暮れる意。○「靡」は、鄭玄が「靡、無」と言う如く、無で、無い意。「靡室靡家」は、「靡室家」の三字句を四字句にしたもので、戰爭が終わらずに征夫が家へ歸れぬことを「室家靡し」と言うのである。○「玁狁」は、毛傳に「玁狁、北狄也」とあり、これを鄭玄が「北狄、今匈奴也」とする如く、北方の異民族の名。北狄、匈奴のこと。○「不遑啓居」は、小雅・鹿鳴之什・四牡篇にも「不遑啓處」とこれと似た句が見え、その毛傳に「遑、暇」とある如く、「遑」は、暇で、ひま、いとまの意。また「啓、跪。處、居也」ともあり、胡承珙が「采薇出車皆作不遑啓居、采薇又有不遑啓處、是處、居義略同」と言う如く、「啓居」は下句、及び四牡篇に見える「啓處」と同義。四牡篇の「啓處」に就いて高亨が「古人席地而坐、兩膝跪着、臀部坐在腳掌上。啓處、安居休息」と言う如く、「啓」は、床に膝をついて坐す意、「啓處」「啓居」は、安坐して休息する意。○「烈烈」は、鄭玄が「烈烈、憂貌」とし、また程俊英等が「烈烈、說文、烈、火猛也。此處形容憂心如焚」と言う如く、憂いの甚だしい様を形容する語。○「載飢載渴」の「載」は、裴學海が「載、猶則也」と言う如く、則で、「すなはち」と讀む。「飢」「渴」は、聞一多が「案古謂性的行爲曰食、性慾未滿足時之生理狀態曰飢、既滿足後曰飽」(『詩經通義』)と言う如く、『詩經』に於いては性的欲求の満たされない状態を言う場合が多いが、ここは文字通り飢え渴く意と解すべきであろう。「載飢載渴」とは、陳奐が「飢、渴、皆言其

戍役之情苦」と言う如く、征役に従事することの勞苦を言うもの。○「我戍未定」の「戍」は、王風・揚之水篇の毛傳に「戍、守也」とあり、守で、守り、戍役の意。「定」は、鄭玄が「定、止也」と言う如く、止む意。「我戍未定」は、我が軍の戍役が終息しない、即ち戦役が終息しないことを言う。○「靡所歸聘」は、現行本は「靡使歸聘」に作るが、馬瑞辰が「釋文、靡使、如字、本又作靡所。瑞辰按、作靡所者是也」と言うに従い、「使」を「所」に改めた。「聘」は、毛傳に「聘、問也」とあり、陳奐も「隱九年穀梁傳、荀子大略篇、皆云、聘、問也」と言う如く、問で、訪ねる意。「歸聘」とは、故郷に歸つて家族の安否を問うこと。○「陽」は、鄭玄が「十月爲陽」とすることから、陰曆十月の意とする説が多いが、これはとらない。豳風・七月篇「春日載陽」を鄭玄が「陽、溫也」とし、また本篇に於いても高亨が「陽、天暖」と解していることから、溫で、氣候が暖くなる意と解する。○「王事靡盬」の「王事」は、清原宣賢が「行役と云て、いくさにつかはるゝことぞ」と言う如く、戦役、征役の意。「盬」は、王引之が「今案盬者、息也。王事靡盬者、王事靡有止息也。……爾雅曰、棲遲、憩休、苦、息也。苦讀與靡盬之盬同」(『經義述聞』)と言う如く、苦の假借字で、止息する、息む意。○「疚」は、毛傳に「疚、病」とあり、病む、いたむ意。○「來」は、鄭玄が「來、猶反也。據家曰來」と言う如く、反、家に歸る意。

采薇篇の採草の興詞に就いて述べる前に、本篇の章の構成と詩意及び各章首句「采薇采薇」の主語(謠い手)に就いて觸れておく。赤塚忠は、本篇の採草に就いて、「野邊の薇わらびを摘んで食膳に供えるのは、婦人の務めでもあるが、またその夫への愛情の表明でもある。『詩經』では、薇に限らず、野草を採集することは女性の男性に對する思慕を表す興詞となっている。恐らくここでは女の舞人が片手に薇を持ち、薇を摘む仕ぐさをしながら、下手から次第に『常之華』のある舞臺の中央へと登場するのである。その思慕の切情にもかかわらず出征の夫は歸つて來ない。『薇亦作止(薇むすまた作れり)』『薇亦柔止(薇むすまた柔なかなり)』など、薇の成長によつて空しく過ぎて行く時と悲嘆の深まりとを表しているのは、修辭の妙味である」<sup>1)</sup>と論じ、この詩を男女の唱和に據つて構成された劇詩であるとして、第一章から第四章は出征した夫の歸還を待つ婦人に扮する女性が謠い、第五章は出征兵士に扮した男性が謠い、第六章は兵士と婦人の合唱であつたと解する。<sup>12)</sup>

境武男が更に赤塚説を發展させ、「まず思婦の歌ではじまり、出征者の歌がそれを承ける形式で一章を成立せしめたのが第一章より第四章までの形式である。各章の前四句と後四句とは押韻の上からしても、表現にちがいがあり、男子（出征者）と女子（出征者の妻）との掛合いの歌ではじまる」と解し、第一章から第五章の章を更に前四句、後四句に分け、そのうち第一章から第四章に就いては前四句を女性が、後四句を男性が謠う掛合いであるとし、第五章に就いては前四句を男性が、後四句を女性が謠う掛合いであるとし、第六章は男女の合唱に據つて收束するという構成をとるとする<sup>(13)</sup>は、卓見であると思う。

采薇篇は征夫に扮した男子とその歸りを待つ婦人に扮した女子とが歌い舞つた劇詩であり、第一、二、三章は、前四句を女子が謠い、後四句を男子が謠うものであつたと解せられる。

各章首二句に「采薇采薇、薇亦作止」「采薇采薇、薇亦柔止」「采薇采薇、薇亦剛止」と謠われる採草行爲は、征夫ではなく、その歸りを待つ女性の手によるものであつた。これらの首二句は、朱熹が「興也」と言う如く興詞であり、ここで女子が「薇」を摘むのは境界神に供する爲で、出征者の無事な歸還を祈願する目的のもとに爲された呪的行爲と解すべきなのである。

以上の解釋により采薇篇第一、二、三章に訓讀と口語譯を施すと以下の如くなる。

#### 〔訓讀〕

第一章 「薇を采らん薇を采らん、薇亦作れり。日に歸れ日に歸れ、歳亦莫れんとす」

「室靡く家靡きは、玁狁の故。啓居する違あらざるは、玁狁の故」

第二章 「薇を采らん薇を采らん、薇亦柔らかならん。日に歸れ日に歸れ、心亦憂へん」

「憂心烈烈たり、載ち飢ゑ載ち渴く。我が戍未だ定まざれば、歸聘する所靡けん」

第三章 「薇を采らん薇を采らん、薇亦剛からん。日に歸れ日に歸れ、歳亦陽かならんとす」

「王事<sup>や</sup>監<sup>や</sup>むこと靡<sup>や</sup>ければ、啓處する違あらず。憂心<sup>はなだ</sup>孔<sup>や</sup>た疚<sup>や</sup>むも、我行<sup>かへ</sup>き來らず」

〔口語譯〕

第一章 (婦人)「境界神に捧げんと」ノエンドウを摘もうノエンドウの芽が生えたから。(我が夫よ) いざ歸れいざ歸れ、この歳がまた暮れてしまわぬうちに」

(征夫)「私に室家がないのは、攻め來る獫狁のせい。私に憩う暇もないのは、攻め來る獫狁のせい」

第二章 (婦人)「境界神に捧げんと」ノエンドウを摘もうノエンドウが柔かいうちに。(わが夫よ) いざ歸れいざ歸れ、私の心が憂いでむすばれぬうちに」

(征夫)「憂える心は堪え難く、その苦しみは飢えかつ渴くが如し。我が守りはなおも止まず、故郷を訪ねることもできぬ」

第三章 (婦人)「境界神に捧げんと」ノエンドウを摘もうノエンドウが固くなってしまふから。(わが夫よ) いざ歸れいざ歸れ、季節が移り變わらぬうちに」

(征夫)「戦争が終わらぬので、私には憩う暇もない。心は憂いに傷むも、私は歸ることができない」

采薇篇第三章の「王事靡盬」は、戦役の終息しないことを謠う句であつたが、同じ句が小雅・鹿鳴之什・杕杜篇にも見える。

第一章 有<sup>○</sup>杕<sup>○</sup>之<sup>○</sup>杜<sup>○</sup>、有<sup>○</sup>睨<sup>○</sup>其<sup>○</sup>實<sup>○</sup>。王<sup>○</sup>事<sup>○</sup>靡<sup>○</sup>盬<sup>○</sup>、繼<sup>○</sup>嗣<sup>○</sup>我<sup>○</sup>日<sup>○</sup>。日<sup>○</sup>月<sup>○</sup>陽<sup>○</sup>止<sup>○</sup>、女<sup>○</sup>心<sup>○</sup>傷<sup>○</sup>止<sup>○</sup>。征<sup>○</sup>夫<sup>○</sup>遄<sup>○</sup>止<sup>○</sup>。

第二章 有<sup>○</sup>杕<sup>○</sup>之<sup>○</sup>杜<sup>○</sup>、其<sup>○</sup>葉<sup>○</sup>萋<sup>○</sup>萋<sup>○</sup>。王<sup>○</sup>事<sup>○</sup>靡<sup>○</sup>盬<sup>○</sup>、我<sup>○</sup>心<sup>○</sup>傷<sup>○</sup>悲<sup>○</sup>。杵<sup>○</sup>木<sup>○</sup>萋<sup>○</sup>止<sup>○</sup>、女<sup>○</sup>心<sup>○</sup>悲<sup>○</sup>止<sup>○</sup>。征<sup>○</sup>夫<sup>○</sup>歸<sup>○</sup>止<sup>○</sup>。

第三章 陟<sup>○</sup>彼<sup>○</sup>北<sup>○</sup>山<sup>○</sup>、言<sup>○</sup>采<sup>○</sup>其<sup>○</sup>杞<sup>○</sup>。王<sup>○</sup>事<sup>○</sup>靡<sup>○</sup>盬<sup>○</sup>、憂<sup>○</sup>我<sup>○</sup>父<sup>○</sup>母<sup>○</sup>。檀<sup>○</sup>車<sup>○</sup>幘<sup>○</sup>幘<sup>○</sup>、四<sup>○</sup>牡<sup>○</sup>瘠<sup>○</sup>瘠<sup>○</sup>。征<sup>○</sup>夫<sup>○</sup>不<sup>○</sup>遠<sup>○</sup>。

第四章 匪<sup>○</sup>載<sup>○</sup>匪<sup>○</sup>來<sup>○</sup>、憂<sup>○</sup>心<sup>○</sup>孔<sup>○</sup>疚<sup>○</sup>。期<sup>○</sup>逝<sup>○</sup>不<sup>○</sup>至<sup>○</sup>、而<sup>○</sup>多<sup>○</sup>爲<sup>○</sup>恤<sup>○</sup>。卜<sup>○</sup>筮<sup>○</sup>偕<sup>○</sup>止<sup>○</sup>、會<sup>○</sup>言<sup>○</sup>止<sup>○</sup>近<sup>○</sup>。征<sup>○</sup>夫<sup>○</sup>邇<sup>○</sup>止<sup>○</sup>。

(押韻 第一章 ○〓魚部。●〓質部。△〓陽部。 第二章 ○〓魚部。▲〓脂部、◆〓微部…脂微合韻。 第三章

◎〓之部。◇〓寒部。 第四章 ◎〓之部。●〓質部。▲〓脂部)

〔訓讀〕

第一章 「有林の杜よ、睨たる其の實よ。王事監むこと靡ければ、我が日を繼嗣す」

「日月陽なれば、女心傷まん。征夫遑あらん」

第二章 「有林の杜よ、其の葉萋萋たり。王事監むこと靡ければ、我が心傷悲す」

「卉木萋たれば、女心悲しまん。征夫歸らん」

第三章 「彼の北山に陟り、言に其の杞を采らん。王事監むこと靡ければ、我が父母を憂へしむ」

「檀車幘幘たり、四牡瘡瘡たり。征夫遠からざらん」

第四章 「載るに匪ず來るに匪ざれば、憂心孔だ疚む。期逝くも至らざれば、而ち多く恤ひを爲す」

「トも筮も偕とし、會ふこと言に近からん。征夫邇からん」

〔口語譯〕

第一章 (女) 「狄族の(境界神が降り来る) 依代のヤマナシの樹よ、つややかなるその實よ。戦役が終わらぬので、あの人の歸りを待つ日が續く」

(巫) 「季節が移ろい暖かなれば、待つ日の長きにそなたの心は悲しみにうちひしがれよう。だが夫は役を終えようぞ」

第二章 (女) 「狄族の(境界神が降り来る) 依代のヤマナシの樹よ、盛んに茂れるその葉よ。戦役が終わらぬので、私の心は悲しみ痛む」

(巫) 「季節が移ろい葉も茂れば、待つ日の長きにそなたの心は悲しみにうちひしがれよう。だが夫は歸つて來ようぞ」

第三章 (女) 「あの北山にのぼり、(境界神にお供えする) クコの葉を摘もう。戦役が終わらぬので、私の父母は憂い悲し

む」

(巫)「兵車の進むははのろのと、四頭の馬は疲れ病む。だが夫は近くまで来ていようぞ」

第四章 (女)「(夫が)兵車に乗り歸り来る様子もないので、心は憂い病むばかり。約束の日を過ぎても歸らぬので、ただもう憂いは増すばかり」

(巫)「卜も筮も吉と出て、二人が會う日は近からん。夫はすぐそこまで来ていようぞ」

訓讀と口語譯を見てもわかる如く、この詩も采薇篇と同じく各章が謠い手によって前半と後半に分かれる構成になっていると解釋すべき詩である。赤塚忠がこの詩に就いて、「杖杜篇は、衛戍または戦地に夫を送っている妻の慨きと、これを慰める神巫(恐らく社の内、または社木の背後にいたのであろう)とのさまを演ずる劇曲である。小雅のうちに收録されているが、その『有杖之杜』にかけていることから推して、杖族の作であり、その社の祭禮で演ぜられていたものを周の宮廷で採用したか、または杖族の優倡ゆうしょうが周の宮廷で演じたかであろう」と論じ、各章前四句を征夫の歸還を願う妻に扮した女性が謠い、後三句を神巫が謠う構成に解しており、これに従って右の如く解釋した。

赤塚は各章の句の構成を前四句、後三句に分けた理由に就いては觸れていないが、恐らく次の二點によるものかと思われる。一つは、前四句では「我」という人稱代名詞が用いられているのに對して、後三句にはそれが無く、代わりに「女」「征夫」という稱謂が用いられている點である。今一つは、第三章は該當しないのであるが、第一、二、四章の後三句には句末に「止」が用いられているのに對して、前四句にはそれが無い點である。前四句と後三句では、語の使い方に明確な相違があることがわかるであろう。

前二章首句に見える「杜(和名ヤマナシ)」は、杖①(狄)族の境界神の依代である。首二句の「有杖之杜、有旻其實」②「有杖之杜、其葉萋萋」は、依代たる「杜」に境界神を憑依せしめ、征夫達の無事な歸還を祈願する爲の興詞なのである。③採草の興詞は第三章に「陟彼北山、言采其杞」とあり、前二章と興詞の種類は異なるが、これも境界神を祀る爲の興詞と解すべ

きである。

第三章二句目に見える「杞」は、ナス科の落葉小灌木で、潘富俊が「苗和幼葉可作菜蔬或代茶飲、蘇東坡稱枸杞苗爲仙苗及仙草。果實早已成爲民間重要藥材、據說有補腎、益陽之效。古人還認爲久服枸杞可使白頭髮變黑且能延年益壽、返老還童。因此春食苗、夏食葉、秋食花實、冬食根、庶幾乎西河南陽之壽、一年四季、葉、花、果實、根都是食品及藥材」（前掲書一七九頁）と言う如く、若葉は食用となり、或いは茶の代用として用いられ、葉の他、花、果實、根も食用とされる。また樹皮や種子は古くから藥效があるとされ、長壽を齎す藥として廣く用いられたと言う。和名はクコ。我が國に於いても強壯の效果があるとされる植物で、柴田桂太によると、根皮を剥ぎ乾燥させたものを地骨皮、葉を乾燥させたものを枸杞葉と呼び、共に漢方藥で解熱劑に用い、若葉を浸し物等としたり、飯に混ぜて炊き、また乾かして茶の代用ともするという（前掲書一六九頁）。

如上の「杞」の藥效は廣く知られる所であるが、既に述べて來た如く、杕杜篇第三章に謠われる「杞」の採集も、その藥效故の行爲ではなかったと考えられる。「陟彼北山、言采其杞」の句からは、「杞」の葉、花、實、根の何れを採集しているかはわからないが、いずれを採集するにしてもこれは食用を目的とするものであり、境界神に供する蔬菜とする爲に採集するを謠ったものと考えられる。周南・卷耳篇、小雅・鹿鳴之什・采薇篇、同出車篇に於いては「卷耳」「薇」「蘩」の葉の部分を採集することが謠われていたので、ここも「杞」の葉の採集と解しておく。

杕杜篇は境界神を祀り、征夫の無事な歸還を祈願する内容の詩であり、第三章に「陟彼北山、言采其杞」と謠われる採草の興詞は、境界神に供する蔬菜を採集するという呪的行爲を謠うものであった。

杕杜篇と同じ採草の興詞が小雅・谷風之什・北山篇にも見え、その第一章に「陟彼北山、言采其杞。偕偕士子、朝夕從事。王事靡盬、憂我父母」と謠われる。以下に第一章の語釋を記す。

○「陟」は、周南・陟岵篇の毛傳に「陟、升也」とあり、のぼる意。○「言其采杞」の「言」は、王引之が「言、云也」。

語詞也」とするにより、「（一）」と讀む語助詞。「采」は、小雅・魚藻之什・采芣篇に既出。採の原字で、取る意。「杞」は、和名クコ。○「偕偕士子」の「偕偕」は、毛傳に「偕偕強壯貌」とあり、陳奐が「偕偕爲強壯。強當作彊。說文、偕、彊也。引詩偕偕士子、本傳訓也。大玄彊次四、爰聰爰明、左右彊彊。測曰、爰聰爰明、庶土方來也。又增上九測曰、群士彊彊。偕偕與彊彊同」と解し、また王先謙が「偕偕、傳訓強壯貌、強當爲彊。說文、彊、弓有力也。偕、彊也。引詩偕偕士子」と解する如く、彊彊で、強健な様を形容する語。「士子」は、毛傳に「士子有王事者也」とあるが、これは陳奐が「士讀爲事。傳云士子有王事者、王事探下句爲訓、從事、從王事也」とするによれば、下句に見える「從事」「王事」から解したものであると思われる。しかし「朝夕從事」の主語は「士子」であるが、「王事靡盬」の「王事」に従事する者は、「士子」ではなく、征夫達である。「士子」は、「朝夕從事」する者、即ち「事（＝祭祀）」に従事する男子を指して言う。○「朝夕從事」は、家井眞が小雅・節南山之什・雨無正篇に見える「朝夕」に就いて「馬瑞辰が『瑞辰按、朝夕與夙夜對言。周語、夙夜、敬也。朝夕義亦爲敬』と言う如く、『夙夜』と對言し、『夙夜』と同じく、恐れ慎む意。『朝（舟聲）』と『夙』は雙聲で假借。『夕』『夜』は疊韻で假借。即ち『朝夕』は『夙夜』と同じで跼蹐の假借字、恐れ慎む意。克盥に『且其用朝夕、享于皇祖考（且つ其れ用て朝夕し、皇祖考に享せよ）』、『僞古文尚書』說命上にも『命之曰、朝夕納誨、以輔台德（之に命じて曰く、朝夕して誨を納れ、以て台が德を輔けよ）』とその用法が残り、小雅・谷風之什・北山篇に『偕偕士子、朝夕從事（『事』は宗廟の事）』、小雅・魚藻之什・何艸不黃篇に『朝夕不暇』、商頌・那篇に『溫恭朝夕、執事有恪』とあり、馬瑞辰も言う如く、總て慎む意で使用されている<sup>(19)</sup>と言う如く、「朝夕」は跼蹐の假借字で、慎む意。「從事」の「事」は、家井眞は「宗廟の事」<sup>(20)</sup>と解するが、「事」は、仕に通じ、共に祀の同韻假借字と考えられる。祀り、祭祀の意。<sup>(21)</sup>「朝夕從事」は、慎んで祭祀に服する意。○「王事靡盬」は、小雅・鹿鳴之什・采芣篇に既出。「王事」は戰役の意。「靡」は否定詞。「盬」は苦の假借字で、息む、止息する意。

首二句「陟彼北山、言其采杞」に就いて、朱熹は「賦也」とし、「杞」を採る理由を「自言陟北山、而采杞以食者、皆強



壯之人、而朝夕從事者也」と解するが、この二句は興詞と考えるべきである。

家井眞は北山篇第一章の詩意、及び採草の興詞に就いて、「北山篇（二〇五）は、『陟彼北山、言采其杞（彼の北山に陟り、言に其の杞を采る）』で歌い興こす。これは女性が想う男性のためにする呪的行爲である採草の興詞であることに據り、女性が男性を想う詩であることは間違いない。それでは一體何を想うのであろうか。第一章で、北山に登り、杞を採る。立派な若武者は、戦役に従うも、戦争は終わらずに、父母を悲しませている、と歌う。第五章末句に至つては、『或いは王事に鞅掌す』と征夫が戦争に取り亂す様を歌い、戦争を怨嗟すらしている。そこで一族の女性達が出征した若者の無事の歸還を想うのである。この詩の詩意もまた一族の宗廟に於いて、祖靈に對し出征した一族の若者の一日も早い歸還を祈願する宗教假面歌舞劇詩である」と解する。採草を女性が征夫の無事な歸還を祈る爲の呪的行爲とする點に就いては正しいと思われるが、その祈願する對象を祖靈と解する點は肯首し難く、これは境界神と解したい。即ち北山篇第一章は境界神を祀り、征夫の無事な歸還を祈願する内容を謠うものであり、「陟彼北山、言采其杞」は、境界神に供する蔬菜を採集するという呪的行爲であつた。そしてその境界神祭祀に従事する壯健なる男子を「偕偕士子、朝夕從事」と謠い、「王事靡盬、憂我父母」と、戦役が長びくが故の父母の憂いを訴えることによって、戦役の速やかな終息と、征夫の無事な歸還が祈られたのである。

以上の解釋により北山篇第一章の訓讀と口語譯を記す。

〔訓讀〕彼の北山に陟り、言に其の杞を采らん。偕偕たる士子は、朝夕して事に従ふ。王事<sup>や</sup>靡まざれば、我が父母を憂へしめん。

〔口語譯〕あの北山に登つて、（境界神に供せんと）杞の葉を摘もう。壯健なる男子は、慎んで（境界神）祭祀に従事する。戦役が終わらぬので、我が父母は（征夫の身を案じて）胸を傷めている。

(四)

『詩經』の詩がまた宗教詩としての呪力を有していた時代、様々な國や民族毎に境界という空間が神聖な、また畏怖すべき場所と見なされ、そこに神の存在が信じられていた。人々はその神を祀り、共同體の内から外へと赴く者があれば、その身體の安全と無事な歸還をその神に祈願したのであろう。如上の祭祀は文獻資料には明確な痕跡を残さないが、『詩經』の詩の中にはそれが残されていると思う。

『詩經』中に謠われる採草の興詞の一部は、その境界に存するとされた神を祀ることに使用された。それは供物であり、或いは祭服を染め上げる染料であつた。供物や染料となる草を摘む行爲を謠うことで、その神を祀り、出征者の無事な歸還を祈願していた呪詞が、やがて定型化し、興詞へと定着していったのである。その興詞、乃至は興的發想を有する句の見える詩七篇(章)を本論では解釋した。

周南・卷耳篇第一章の採草の興詞、「采采卷耳、不盈頃筐」は、「卷耳(オナモミ)」を摘むを謠うことで、その地の境界空間である道の隈に「卷耳」を供して境界神を祀り、征夫の無事を祈願するものであつた。

小雅・魚藻之什・采緑篇第一、二章の採草の興詞、「終朝采緑、不盈一掬」「終朝采藍、不盈一擔」は、「緑(コブナグサ)」や「藍(アイ)」を摘むを謠うことで、黄や藍に染め上げた祭服を身に着けて境界神を祀り、征夫の無事を祈願するものであつた。

小雅・鹿鳴之什・出車篇第六章の採草の句、「采繁祁祁」は、章の首句にある興詞の形式を取つてはいないが、これも境界神を祀る爲の採草であり、「繁(シロヨモギ)」を摘むを謠うことで、古の征夫達が無事に歸還し戦役が終息したことを象徴する興的發想を有する句であつた。

邶風・七月篇第二章の採草の句、「遵彼微行、爰求柔桑」「春日遲遲、采繁祁祁」は、これも出車篇と同じく興詞の形式を

取つてはいないが境界神を祀る爲の採草であり、「桑（クワ）」や「繫（シロヨモギ）」を摘むを諺うことで、出立せんとする征夫達の旅の安全を祈願するものであった。

小雅・鹿鳴之什・采薇篇第一、二、三章の採草の興詞、「采薇薇采薇薇亦作止」「采薇薇采薇薇亦柔止」「采薇薇采薇薇亦剛止」は、「薇（ノエンドウ）」を摘むを諺うことで境界神を祀り、戦役の速やかな終息と、征夫達の無事な歸還を祈願するものであった。

小雅・鹿鳴之什・杕杜篇第三章、及び小雅・谷風之什・北山篇第一章の採草の興詞、「陟彼北山、言采其杞」は、「杞（クコ）」を摘むを諺うことで境界神を祀り、戦役の速やかな終息と、征夫達の無事な歸還を祈願するものであった。

共同體によつて境界と見なされる空間は複數存在したであろう。それは門、道の隈、四辻、河川の隈等であつたと考えられ、卷耳篇に「嗟我懷人、寘彼周行」と諺われる如く、採草された植物は供物としてかかる境界空間に捧げられ、祭祀が行われた。それは唐風・有杕之杜篇に諺われる如く、常祭として行われ、境界空間から想定し得る様々な外部からやつて来る害惡や不祥等の祓禳と、一族の安全な生活の保障が祈願せられた。そしてそれ以外に卷耳篇、出車篇等に諺われる如く、征役に赴く者の道中の安全や、征夫の無事な歸還を祈願する目的のもとに境界神祭祀は不定期に行われたものと考えられる。

#### 注

- (1) 詳しくは拙稿『詩經』に於ける境界神祭祀に就いて（『三松學舍大學人文論叢』第七二輯、平成一六年所収）を参照。
- (2) 赤塚忠『詩經研究』（赤塚忠著作集第五卷、研文社 昭和六一年）五七～五八頁。
- (3) 卷耳篇の詳しい解釋に就いては、家井眞前掲書四二七～四三四頁を参照。
- (4) 赤塚忠前掲書一八二頁。
- (5) 有杕之杜篇、菁菁者莪篇の詳しい解釋に就いては、(1) 前掲拙稿一二一～一二六頁、及び拙著『詩經』中（新釋漢文大系二二一、明治書院 平成一〇年）二二三～二三五頁を参照。
- (6) 赤塚忠前掲書七一一頁。
- (7) 境武男前掲書四一一頁。
- (8) 赤塚忠前掲書六八五頁。

- (9) 七月篇の詳しい解釋に就いては、(4) 前掲拙著一一九～一三五頁を参照。
- (10) 采薇篇の詳しい解釋に就いては、(4) 前掲拙著一九三～二〇〇頁を参照。
- (11) 赤塚忠前掲書二九六頁。
- (12) 赤塚忠前掲書一三一～一三三頁、及び二九四～二九九頁。
- (13) 境武男前掲書四〇四～四〇八頁。
- (14) 小雅・鹿鳴之什・杕杜篇の詳しい解釋に就いては、(1) 前掲拙稿一三〇～一三五頁を参照。
- (15) 赤塚忠前掲書九六頁。
- (16) 赤塚忠前掲書九四～九六頁。
- (17) 郭沫若『兩周金文辭大系圖錄攷釋』(科學出版社 一九五七年) 二二八頁。
- (18) (1) 前掲拙稿一三四頁。
- (19) 家井眞前掲書三三三頁。
- (20) 家井眞前掲書三三三頁。
- (21) 「事」「仕」の詳しい解釋に就いては、『詩經』祖靈祭祀詩に於ける採草の興詞に就いて」に於いて後日詳論の豫定である。
- (22) 家井眞前掲書四五七～四五八頁。

※植物の和名に、参考にした工具書を特に明記していない部分は、潘富俊著・呂勝由攝影『詩經植物圖鑑』(貓頭鷹出版 二〇〇一年)の學名によって、柴田桂太『資源植物事典・増補改訂版』(北隆館 昭和二十四年)の和名に同定させたものである。

※右記の他に使用した工具書に就いては、(1) 前掲拙稿一三八～一三九頁を参照。